

「小さな拠点」づくり全国フォーラム 多様な人びとが活躍する地域づくりとは

～中間支援の実践者からの提言～ 開催概要

● 開催要領

- 開催日時 2026年3月2日（月）
- 開催場所 オンライン（zoom）
- 参加者
 - ・行政関係者（国）
 - ・行政関係者（都道府県）
 - ・行政関係者（市区町村）
 - ・地域活動団体
 - ・市民活動支援センター
 - ・民間企業
 など532名（申込者数）



● プログラム

① 趣旨説明

② 話題提供：

人口減少時代の地域づくりと中間支援
～ “ひとが活躍”からのアプローチ ～

講師：高崎経済大学地域政策学部 教授 櫻井常矢氏

③ トークセッション：

多様な人びとが活躍する地域づくりとは

事例発表：阪南市社会福祉協議会 猪俣健一氏（大阪府阪南市）

里山くらしLABO 池田水穂子氏（静岡県静岡市）

モデレーター：櫻井常矢氏

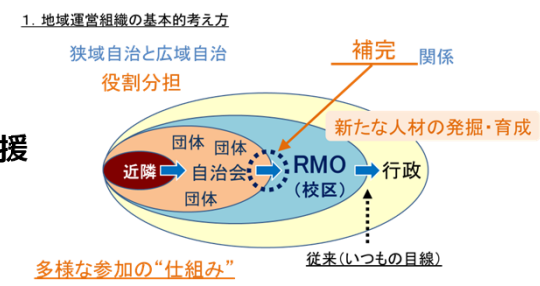
● 話題提供

高崎経済地域政策学部
教授 櫻井常矢氏

● 人口減少時代の地域づくりと中間支援 ～“ひとが活躍”からアプローチ～

(1) 地域運営組織の基本的考え方

- 多様化する地域課題及び縮小に向かう地域資源に対応する地域づくりのキーワードは、多様な主体間の連携（つながり）による**補完関係**
- **補完関係**：近隣自治・自治会の狭域自治は大切であるが、補えない場合はRMOが補完する。狭域自治と広域自治の役割分担が重要
- 新たな人材の発掘・育成 = 若者や女性など**多様な参加の“仕組み”**



(2) 中間支援の新たな展開

- **プロセスとしての地域づくり**：事業や活動をやることに目的化しがちであるが、「地域課題→話し合い→事業活動→振り返り」のプロセス、事業活動に至るまでのイシューレイジングが重要
- **人づくりのプロセス**：話し合いを通じて人は育つ = “地域の担い手” に
- 中間支援機能の展開：従来の個別団体支援に加えて、**地域自治支援**という新たな中間支援機能が広がってきている
- **地域課題の顕在化・共有化**：「地域担当制による定期訪問」や「円卓会議」などによる潜在的な地域課題の気づき・共有へ

(3) “人を活かす”アプローチ

- **担い手とは**：従来から組織・団体が前提となっており、新たな人材（個人）に出会えない。個人（ひと）へのアプローチ手法が今後の課題
- **「脱組織化」を俯瞰**：自治会加入率低下の一方で、こども食堂や居場所のニーズは高まっている。社会参加の形態が変化による、つながり・活躍の場へのニーズと既存団体の「型」とのズレが生じている

● トークセッション

● 事例紹介



猪俣氏

- 住民主体の地域づくりを支える
 - ・ 阪南市社会福祉協議会の団体及び活動内容について
 - ・ 漁業と福祉の分野を横断した漁福連携の実践
 - ・ 幼稚園跡施設を活用した住民主体の地域拠点運営から、住民による支え合い活動とまちづくり協議会による世代間融合

- 里山くらしLABOの「多様な人びとが生きる地域づくり」とは
 - ・ 里山くらしLABOの活動の経緯、中間支援としての取組全体像
 - ・ 中学生以上全住民アンケート
 - ・ 静岡県大川地区における移住促進への支援
 - ・ 清沢レモン部の事業継承と収益強化の取組



池田氏

● トークセッション

① 中間支援者としてのノウハウ・学び

- 住民主体の地域づくりでは、地民と専門機関での立ち位置の違いを意識し、専門職のノウハウや制度・施策等を地域移譲することが大切。中間支援の役割は、住民主体のサイクルを促進する働き（猪俣氏）
- 目的は課題解決なので、困りごとを細分化し、原因が何かを理解することで、やるべきことは見えてくる。課題は対話で掘り下げている。3つの「お」、押し売り、追い抜き、思い込みはやってはいけない（池田氏）

② 多様な人びとが生きる地域づくり

- 新しい人材“担い手”の発掘、出会い方（櫻井氏）
- 魚福連携は、漁師のつばやきを地域包括職員がキャッチしたことで始まった。現場に足を運び、思いを持った人とどれだけ出会うか、想いを受け止めたらその想いをつなぎ止めて、話し合いの場をデザインすることが重要（猪俣氏）
- 第三者なので地域に入り込んで信頼を得て情報を得る。決まったことに人を当てるのではなく、支援者側が柔軟に対応すること、努力している人の情報を地域で共有することが大切（池田氏）

③ 中間支援組織としての課題・解決策

- 土台となる地域コミュニティの縮小（担い手の減少・高齢化）により、福祉の課題とまちづくり課題・活動領域が近接・融合してきている（猪俣氏）
- 中間支援において行政との関係構築が課題（櫻井氏）
- 手段・手法を目的にするケースが多い、本来の目的が見えず取組が定着しないところに課題を感じる。事業の中に少ししなやかさがあると解決できることもある（池田氏）
- 支援側のつながりが今後の議論として必要（櫻井氏）
- 各市町村レベルで部局横断のプラットフォームを作って、各施策について議論するテーブル、他分野が連携した取組・施策が必要（猪俣氏）

● トークセッションのまとめ

多様な人びとを活かすための方向性

- ・ 「1人1人のニーズ・課題から出発する」「多様な個人のつばやき」をみんなの取組にする
- ・ 「話し合いの場のデザイン」では、どう場所をつくるか、どこでつばやきをキャッチするかが大切
- ・ 「連携の糸口」は、互いの課題を共有したり認め合ったり相互的な人間関係をつくること



櫻井氏

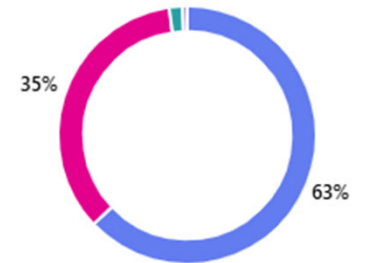
中間支援組織と行政との連携

- ・ 中間支援組織にまかせればどうにかなるのではなく、行政の積極的な関与が必要
- ・ プラットフォームにおいては、行政が現場に関与するスキームが大切
- ・ 行政が地域の目指す姿を描く

● 参加者アンケート結果

全国フォーラムに参加して、あなたの活動・事業に役立つ情報や学びがありましたか。

● 大いに役立つ情報や学びがあった	112
● ある程度、役立つ情報や学びがあった	62
● あまり情報や学びを得られなかった	3
● 役に立たなかった	1



地域づくりとまちづくりのつながりや、担い手の捉え方など非常に視野が広がる内容で大変参考になった



実際の活動事例をトークセッションを通じて深掘りすることで、より具体的で実践的な支援の実情、ノウハウを学ぶことができた

【参加者回答から】